江井ヶ島の瓦

良質の粘土に恵まれた江井ヶ島は、東隣の八木地域と共に瓦の生産が盛んな土地であった。

赤根川河口から北東に約2.4㎞、旧の山陽道に面する西脇の報恩寺（三木合戦時、豊臣方により焼失し、再建されず廃寺）跡から出土した瓦に明徳4年（1393/室町時代）の年号と法隆寺を改修した奈良の瓦大工の橘吉重（よししげ）の幼名の彦次郎名が刻まれていたため話題になった。吉重は大和で数多くの瓦製造を行った人物で、大久保周辺は奈良時代から多くの寺院が建立され、奈良の瓦師の一族である橘氏がたびたび訪れて、普請にあたったと言われ、大和の瓦職人が明石の地で技量を発揮していたことをうかがわせる。

西島の如法寺を改築した大工も橘景正という記録があり、瓦師たちがここに定住して瓦造りを始めたのではないかと言われている。

明石瓦事業協同組合の記録では、室町時代中期に本格的に始まり、慶長5年（1600）に池田輝政が播磨を治めてから盛んになった。第8代明石藩主の松平直明（まつだいらなおあきら）は、大いに産業を奨励し「明石瓦」を政策の1つに取り上げて特産とした。

昭和10年頃に、愛知県三河地方より塩焼瓦（赤瓦）の製法が導入される。戦後の建築ブーム、住宅の洋風化により赤瓦の需要が飛躍的に伸び、昭和30年頃に、ほとんどの瓦業者は黒瓦から赤瓦へと転向し、江井ヶ島の瓦づくりは隆盛期を迎えた。

しかし、粘土の枯渇・公害問題・労働力の流出、重油の高騰等により昭和40年以降、次々と窯の火を消していった。さらに、平成7年の阪神・淡路大震災により重い瓦葺の建物が敬遠されるようになり、最後の瓦工場であった明石窯業㈱が平成18年秋に廃業した。

昭和35年（1960）頃の江井ヶ島の瓦工場

	会　社　名	経営者	所在地
①	（資）岸本瓦工業所	岸本　藤吉	東江井
②	尾仲瓦製造所	尾仲　忠彦	〃
③	（名）崎野洋瓦所	崎野　関治	〃
④	江井島窯業（有）	崎野　邦三	〃
⑤	橘房治瓦工場	橘　房治	〃
⑥	米田瓦工場	米田石五郎	〃
⑦	岸本瓦製造所	岸本　載治	〃
⑧	林洋瓦所	林　勝治	〃
⑨	（株）尾仲洋瓦所	尾仲　信一	〃
⑩	橘瓦製造所	橘　友吉	〃
⑪	かねじ洋瓦工業所	田中　政一	〃
⑫	林瓦工業（株）	林　平治郎	〃
⑬	山里瓦工場	山里　信治	〃
⑭	（資）瓦友	橘　武明	〃
⑮	住徳瓦工場	住徳　保	〃
⑯	田中洋瓦製造所	田中　誠一	〃
⑰	住徳瓦製造所	住徳　軍治	西江井
⑱	日置産業（名）	日置光太郎	〃
⑲	濱田瓦工場	濱田　藤二	〃
⑳	明石窯業（株）	西山　上七	西島
㉑	植田瓦工業（資）	植田　悦治	〃
㉒	西海洋瓦所	西海　佐一	〃
㉓	西海正三製瓦	西海　正三	柳井

八木から江井ヶ島を望む（昭和30年代後半（1960～）頃・（株）山源のHPから）

西海洋瓦所の瓦干し状況（昭和36年頃）

塩焼瓦で葺いた極楽寺本堂

西海洋瓦所の塩焼窯の焚口（昭和35年頃）

あかしの詩

今も健在〝地の味〟

力強く生きる伝統産業

酒とカワラ造り

新聞記事（昭和59年3月7日）